

ルーン・レイクの惨劇

The Murders at Loon Lake
1933
by Kenneth Duane Whipple

主要登場人物

クリフトン・ブレントウッド	ボストンの企業弁護士
アベル(エイブ)・トレンチ	ポートランドの製紙業者
ウォーレン・クランフォード	ニューヨークのタクシー会社役員
マックス・プレンダーギャスト	美術品コレクター
エミリー・トレンチ	アベルの妻
ジュリー・トレンチ	アベルの養女
デイヴィッド・プレンダーギャスト	マックスの息子
エニッド・プレンダーギャスト	マックスの継娘
ドーラ・ウエストニー	マックスの元妻
ジャスパー・コーリス	ウォーレンの秘書
エイザ・ウッド	保安官
ジェイク・パーディ	商店主
ミニー・パーディ	ジェイクの娘
ステイヴ・ラムズデル	隣のコテージの住人
ケント	クリフトンの甥

第一章 死の訪問

ルーン・レイク！ これから先、私はその名を耳にするたびに身震いを禁じ得ないだろう。

悲劇に彩られたあの事件を忘れた人たちは、手つかずの孤独な美と、灰色の崖にエメラルド色のしぶきを上げるサファイアのような風景に惹きつけられ、今でも夏になると避暑に訪れている。好奇心に満ちた人間であればウエスト・マウンテンの山裾に広がる森林をかき分け、今や無惨にも焼け落ちた湖畔のコテージ跡にまで足を運ぶ。それらはかつて、大きな隠れ家 ビツグ・デン小さな隠れ家、小さな隠れ家 リトル・デン小さな隠れ家と呼ばれていた。しかし黒こげになった丸太が散らばるその場所は、もはや慈悲深い森林に飲み込まれようとしていた。

私とは言えば、あの呪われた場所を再び訪れようとは思わないし、またそうする必要もない。目を閉じると、運命を変えたあの八月の一週間と同じ湖の光景——暗い霧に覆われた、陰鬱そのものの光景——が今も脳裏に浮かぶ。死者を乗せて白波をかき分ける離 ヴイクスキップ号のエンジン音の轟き、霧の中に潜む人影と、窓ガラスに浮かんだ死人のような青白い顔、闇に包まれたマツ林を真紅に染めて燃え狂う炎の爆ぜる音——それらは今なお記憶に鮮明だ。そして夢の中でさえも、血も凍るようなルーン アビアビ目アビ科の鳥。また「Abe」には「狂人」の意味もある。の鳴き声が耳にこだまする。

恐怖と懐疑が夜を徹してのさばる中、終局が迫るにつれて二つのデンを臆病者の巣窟に変えていっ

た惨劇という名の饗宴をなぜ防げなかったと、クリフトン伯父は今も自分を責めている。しかし法と正義の力ができなかったことを、伯父は成し遂げたのだ。もし伯父がいなければ――。

いや、ルーン・レイクでの連続殺人をこのように語りだしてはいけない。まずは事件の経緯いきさつから話そうと思う。

* * *

遅ればせの休暇を楽しむべく伯父のクリフトン・ブレントウッドとともにルーン・レイク行きの列車に無事乗り込んだ私は、喜びを隠せないでいた。ここ一週間というものの、いつもは人のよい伯父が憂鬱と苛立ちの兆候を見せていたからである。そして今、新築ながら古めかしい雰囲気を残す北ノースステーション駅で、伯父は特別客車の窓際に身を硬くして座り、長い眉の下にある深く沈んだ青い瞳で薄暗いプラットホームをぼんやり眺めつつ、肉づきのよい長い指を所在なくこすり合わせていた。

いつにないクリフトン伯父の様子には、二つの理由があった。休暇が一週間遅れたのがその一つ。やり手の企業弁護士とはいえ行動の自由が常にあるわけではなく、シヨーマット株式会社株式会社の重役連中と打ち合わせを重ねるうちに、ルーン・レイクで休暇を過ごそうと私に約束した期日が過ぎてしまったのだ。いつもの穏やかな気性が限界を迎えつつあったのも当然だろう。

しかしより重要な第二の理由は、一週間ほど前にルーン・レイクで悲劇的な死を迎えた、四匹のキツネたちのの一人、マックス・ブレンダーギヤストの存在だった。湖を横断していた時代遅れの外輪汽船、ガヴァナー・エンディコット号のボイラーが爆発し、穏やかな湖面に無数の残骸をまき散らし

て沈没するという事故があったのだが、多数の犠牲者の一人にブレンダーギャスト氏がいたのである。かの名高き四人組を襲った初めての悲劇に、クリフトン・ブレントウッドは人一倍打ちひしがれたのだった。

ここで「四匹のキツネたち」の名で知られる四人組の起源と来歴を説明しよう。その名前が付けられたのは今から二十年前、ダートマス大学の旧友四人——クリフトン・ブレントウッド、マックス・ブレンダーギャスト、エイブことアベル・トレンチ、そしてウォレン・克蘭フォード——がグループを結成した時に遡る。私は伯父の机の上に載っていた大判の写真を見たことがある。四人はいずれも洒落た先細のズボンを履き、高い詰め襟の服に身を包みつつ、不気味な風景の前で腕を組んで写っていた。

卒業からおよそ二十年、いくつもの変化が四人に訪れていた。ボストン在住のブレントウッドは企業弁護士として成功を収めている。トレンチ氏はメイン州ポートランドで製紙業を営み、克蘭フォード氏はニューヨークに本社を置くパープル・タクシーの役員となつてこれも成功していた。ただ一人、ブレンダーギャスト氏だけは、元々エキセントリックだった性格が昂じ、今やコレクターとして美術界とその周辺で名を挙げていた。

そうした変化にもかかわらず、「四匹のキツネたち」は毎年夏になると必ずルーン・レイクで顔を合わせていた。人目につかない湾の奥、ウエスト・マウンテンが背後に聳える場所に、四人が学生時代に建てた「キツネの隠れ家」なるコテージがあり、八月の一カ月間をそこで過ごしたのである。彼らは釣り、狩猟、水泳、ボートに興じつつ、自らコックと家政婦を務めることで、文明社会の制約から逃れていた。毎年隠れ家で行なわれるキツネたちの集いは、いつしか一種の儀式になつていった。

だからこそ、わずか一週間遅れただけで伯父がかくも苛立ったことは、私にもよく理解できたのである。

最初のころ、隠れ家はさほど大きくなく、四人入るのが精一杯だったという。その後、四人が裕福になるにつれて隠れ家も大きくなり、さらにもう一軒のコテージ（ビッグ・デン）に対して、リトル・デンが建つに及んで、他の客も毎年夏の休暇に招かれるようになった。今年も四人の他にトレンチの妻と養女、プレンダーギャスト氏の継娘と息子、克蘭フォード氏の秘書、そして私の計十名がルーン・レイクを訪れることになっていた。

走りだす振動が座席に伝わってきた。列車が薄暗いホームから離れると、ほんの少し霞がかつているものの、晴れた真昼の空が頭上に広がった。伯父はようやく両手を落ち着かせ、ほっとしたようにため息を一つついた。

「ようやく出発だな、ケント」と、よく響く楽しげな声で言った。「このままボストンに釘付けじゃないかと思ったよ」

「この一週間、働きづめでしたからね」私も頷いた。「湖まではどれくらいかかるんですか？」「ノース・パイクまで五時間だ。ボストンからだそこが最寄り駅だな。ニューヨークからであればオルバニーを通って、対岸にあるルーン・ハーバーで降りることになる。郵便局もそこにあるんだが、手紙の転送は手配済みかね？」

「ええ、クリフ伯父さん」私は答えた。「ところで、コテージにはどう行くんです？ 汽船が出ていますか？」

クリフトン伯父の表情が曇った。

「ガヴァナー・エンディコット号の事故以来、汽船は出ていない」暗い口調で答える。「ボートが迎えに来ることになっている。お前は初めてだったな、ケント？」

私は頷いた。

「休暇にもつてこいの静かな場所だ」伯父は続けた。「お前たち若者には静かすぎるかもしれない。ルーン・ハーバーにはダンスホールや映画館もあるんだが、さほど賑わっているわけじゃない。退屈するようなら、無理して長居することはないからな」

それに返事をしなかったのは、考え事にふけていたからである。私は伯父に数多くの義理があつて、今回の小旅行もその一つだった。

私がジョージ・ワシントン大学を卒業する直前、父は飛行機事故で死んだ。しかし伯父の援助のおかげで、ハーバード・ロースクールに進むことができた。その年の六月、伯父は私をオフィスに招き、夏休みのあいだ自分の下で働いてはどうかと言った。給料があまりに高額だったので最初は遠慮したけれど、結局押し切られた。働いたのは六週間に過ぎなかったものの、ハーバードで一年かけて学習するより多くのことを吸収したのは間違いないかった。

赤ら顔で眉が濃く、鋼鉄を思わせる銀髪のクリフトン・ブレントウッドは、四十代という若さにもかかわらず、ニューイングランドの法曹界における有力人物として尊敬される存在だった。そうした人間を伯父に持ち、私は誇りを感じていた。

今や市街地を離れた列車はスピードを上げ、人家の少ない郊外をひた走っている。伯父は両手をポケットに入れ、何やら指を動かした。ポケットから手を出したとき、そこにはキャンデーミントが握られていた。

「一つどうだ、ケント？」

私は内心笑みを浮かべてキャンディーミントを受け取った。こうしたものを好んで口にするとというクリフトン・ブレントウッドの昔からの習慣は、愛煙家や薬物中毒者と同じ性癖だと、友人たちは噂していた。

伯父はもう一つポケットから取り出し、口の中に放り込んだ。そして満足げなため息をつきつつ包み紙をポケットにしまい、ミントの香りをしばらく楽しんでいた。

だがキャンディーを完全に溶かして話しだした伯父の青い瞳は、悲しげに曇っていた。

「マックス……もう会えないのか……エニッドとデイヴィッドが気の毒でならん」

「子どもたちですか？」

「そうだ。エニッドは継娘だがね。いや、おそらく大丈夫だ。似たところの少ない親子だったんだよ。それに、あいつは離婚するとき、家族全員に財産を譲ったからな」

「どんな人だったんです？」私は好奇心にかられて訊いた。「伯父さんから名前を聞いて、会えるのを楽しみにしていたんですよ」

伯父は青い瞳をぼんやり遠くに向けつつ、しばらく無言だった。

「妙な奴だったよ」と、ようやく口を開く。「学生時代からそうなんだが、卒業後はますますひどくなった。背が高く色白で、つやのある黄色い口髭、そして青白い瞳と真っ白な両手——典型的な芸術家タイプさ。ところがダートマス大学を卒業した途端、巨額の遺産が転がり込んできた。最初は美術品をコツコツ集めていたのに、大金が入ったせいでコレクションにのめり込んだ。まずは肖像画、次に自筆原稿、そして絵画。去年だったか、そのために初版本のコレクションを売り払ったんだよ。生

きていれば、今ごろはどうなっていたことか……」

「一財産失っていたかもしれないね」私は言った。

「一度に五十万ドル使ったくらいだから」伯父も認めた。「だが、しばらくすると飽きが来て、コレクションを売り払ってしまう——たいいてい利益は出ていたがね。変わった人間だが、金が関係する限り馬鹿ではない。それに、あれほど気のいい人間はいなかったよ。デイヴィッドもその点は父親と似ている。私もデイヴィッドのことは昔から気にかけていたんだ——まあ、エニッドについても同じだがな」

「爆発事故について、もっと詳しいことをご存知ですか？」一瞬間を置いてから、私は訊いた。

しかし伯父は首をゆっくり振った。

「ありきたりな事故さ。あんな田舎の湖じゃ、安全検査もおざなりにしか行なわれない。沈まずに航行さえできれば、営業許可は下りるんだ。マックスはデンの準備を整えるため、他の連中より一日早くルーン・レイクに来ていた。たった二十四時間の差で——」

伯父はそこで言葉を切り、両手をしきりにこすり合わせながら窓外の風景に目を向けた。その平静な外見の下には他者に対する友誼の厚さと、それに劣らぬほど強烈な好悪の情が潜んでいる。マックス・プレnderギーヤストの死が事故によるものでなければ、その命を奪ったルーン・レイクなどより望ましい避暑地を、私はいくつも頭に思い浮かべることができただろう。

私も無言のまま、過ぎ去りゆく景色を興味深く眺めた。ワシントンに生まれ育った私は、過去一年間マサチューセッツ州で暮らしていたにもかかわらず、ボストンより北には行ったことがないのである。緩やかにうねるマサチューセッツの地形が、わずか数マイルで起伏の激しいニューイングランド

北部の荒涼たる田園地帯へと姿を変える中、私は驚嘆に似た感情を抱きつつ、眼前の目新しい風景にいつしか没頭していった。

ヴァージニア州とメリーランド州にもカンバーランド、アレゲニー、ブルーリッジといった山々があつて、車を使えばワシントンからでも気軽に行くことができる。しかしその中のどれ一つとして、これから訪れる場所の荒涼たる雄大さ、なだらかにうねる森林、花崗岩の孤峰、そして緑に覆われた溪谷の潑刺とした美は見られない。

光り輝く日光と晴れた青空の下、私たちは正午少し前にポストンを発った。しかし数時間かけてこの大都会から離れるにつれ、薄く陰気な灰色の雲が徐々に空を覆いだした。低く垂れ込める雲の欠片は経帷子のように山の頂を横切り、時おり霧のようなものが溪谷を包んでいた。

「もうすぐだ、ケント」陰気な空と鉛色の風景を悲しげに眺めながら、伯父が口を開いた。「ルー・レイクは近くの悪天候を招き寄せるんだよ。到着までに雨が降りだしても不思議じゃないね」伯父の不吉な予言は当たらずとも遠からじだった。モミの原始林が形作る薄暗いトンネルを抜け出ると、聳え立つ峰々の間を水蒸気の帯が細長く伸びており、その頂は霞に隠れて見えなかった。

「ほら、あれだ！」伯父が声を上げる。

カーブを曲がり終えた列車は再び森に入り、過ぎ去ってゆく木々の緑が視界を遮った。そして森を出ると、暗くくすんだルー・レイクの陰鬱な湖面が目飛び込んできた。水面を覆う霧が厚く、向こう岸はまったく見えない。

私の失望を感じた伯父は、申し訳なさそうな視線を向けた。

「いつもはこうじゃないんだ。晴れた日まで待てばいいさ！」